

ボタン

服を留めて固定させる手段としてのボタンは何時ごろから使われるようになったのでしょうか。またどうしてボタンと呼ぶのでしょうか。サロンの第 50 回でも取り上げましたが、もう一度そのあたりのことを見ていくことにしましょう。

まずはボタンという名前はどこから来たのかというと古ラテン語の *bottare*、もしくは古ゲルマン語の *boton* だと言われています。後者は蕾という意味ですが金属製のボタンの皺が蕾のように見える、あるいは本当に蕾を使っていたからだなどの説があります。

起源ですが二万年前に骨から作ったピンがあります。衣服を纏うためには何らかの留め具が必要だったようです。古代エジプトでも留め具として使われていたとも言われていますが確定したものではありません。クレオパトラがボタンを使用していたという資料が発見されれば面白いのですが、どうやら紐で縛っていたようです。古代ギリシャで動物の骨や植物を用いていたとの説もあり、それですとアリストテレスやプラトンがボタン付きの服を着ていたということになります。

はっきりとしているのは 13 世紀頃から使われだして 16~17 世紀頃にはヨーロッパ特にフランスで大量に生産されていたということです。この頃には留め具としての用途よりも家紋などを彫って家名を見せるのが主な役割でした。丁度武士の着物に必ず家紋を入れているようなものです。一つ一つ手作りでしたのでとても高価なものでした。その頃は男性用でしたが 19 世紀となると産業革命とともに女性用が現れ、留め具だけでなくファッションとしての用途も持つようになりました。大量生産されたので価格も安くなりました。この頃にはボヘミアで作られたガラス製のボタンが宝石のように見えることから人気がありました。また薩摩からも焼き物のボタンが大量に輸出されていました。この薩摩ボタンは現在でも製造されていて愛好者も多いものです。

薩摩ボタン色々



瓔珞紋 (ようらくもん)

花芯椿

向い鶴

着物を着ていた日本ではボタンを使うことはなかったのですが名前だけは入っていました。そして幕末になると足袋のこはぜのようなものを作っていました。1871年(明治四年)に太政官布告が発せられて軍隊の将校服が定められると、こはぜを作っていた職人がこぞってボタンを作るようになりました。この時に穴かがりに金属製品を入れて紐の代用にするとしたことから「紐釦」と書いてボタンと読ませました。そのうち何時の間にか紐が取れて釦となったわけです。

また民間でも洋服を着るようになったことからボタンの需要が急増しました。その頃にアラフラ海の黒蝶貝で作ったボタンが世界的な人気となり高値で取引されたことからオーストラリアに渡る人が多くなりましたが、その中にはかなりの数の日本人もいました。

素材はこのように貝類や木材、金属など多岐に渡っていました。セルロイドが登場したのは或る意味必然だったと言えるかもしれません。というのはボタンには丸いもの、長細いもの、角型など様々な形があります。またお洒落的要素から色々な色が要求されます。セルロイドはこれらの要求を総て満たしていました。

しかしセルロイドボタンの盛りは短いものでした。セルロイドには紫外線などで色褪せをする、脆い、燃えやすいなどの欠点があります。そのために外にあって紫外線が当たり、外部のものにぶつかったりする、時には火に近づくこともあるというボタンの素材にするには不向きなところがありました。さらに各種プラスチックの登場、大量生産システムの確立により姿を消していきました。もし今でもお持ちの方がいらっしゃいましたら大事に扱ってください。